

やっぱり私は アコーディオンが好き

かとうかなこは、どちらかとい
うと内向的で人見知りも激しい
それなのに、ステージに立つと人
が変ったように陽気になる

なぜかわからないけど、アコ
ーディオンを抱えていると勇気が
わいてくる。まるで自分の一部み
たい

4歳のころ、アコーディオンを
弾く姉がうちやまして仕方な
かった。父親に「どれか」が読め
るようになったら教えてあげる」
と聞かれ、一生懸命ひらがなを覚
えた。いざアコーディオンの練習
を始めると、今度は時計が読めな
くて時間が計れない。仕方なく
時間ではなく、この練習を何回
と教えるが、アコーディオンと
共に成長してきた

しかし、ずっと一緒にいるのが
当たり前すぎて、果たして本当に
かとうかなこは、どちらかとい
うと内向的で人見知りも激しい
それなのに、ステージに立つと人
が変ったように陽気になる

これが自分の生きる道なのかと
かはわからなかった。ほかにやり
たいことも見つからなくて、高校
を卒業後、答えを探しにフランス
へと旅立った

人口わずか3,000人、遊ぶ場所
はおろかテレビさえない小さな町
の専門学校は、週末になるとほと
んどの生徒が帰省してしまう。た
った一人残された家で、美しい田
舎町の景色とアコーディオンだけ
を相手に過ごした。そんな、アコ
ーディオン漬けの毎日の中で、
ようやく情熱することができた

「やっぱり私はアコーディオンが
好き」
そのフランスでボタン式アコー
ディオンに出会ったのは、日本
で一般的に普及している鍵盤式の
楽器はやめた。2,000以上のボタ
ンを操らなければならないボタン
式は、まるで別の楽器のようにも
感じられた

初めて抱えたとき、今まで味わ
ったことのない安心感を感じて、
すごくかわいい、と思った

それから家にくつろぐときも
楽器を胸に抱えるようになった
抱えたまま眠ってしまうこともあ
るくらいアコーディオンは大切な
パートナーだ。すべての楽器に名
前をつけて、ライブでもハンドの
メンバーであるかのように紹介し
ている

アコーディオンは蛇腹の使い方
が命だ。心臓の近くにひたりと
抱え、空気を入れて、出して
まるで思っかいのように、感じた
ことをそのまま蛇腹に伝えていく
「だからこそ、たれかみたいじゃ
ない、自分らしい演奏をしたい」
帰国後、演奏活動のかたわら、
ボタン式アコーディオンの教室を
開いた

「昔はアコーディオンを習う友達
なんていなくて、ずっと孤独だっ
た。今、日本でこんなにたくさん
のアコーディオン好きな人たちに
囲まれて幸せ」

ライター 森田悦子
写真 馬場啓貴
タイトル写真のモデルは本人

Under 29
1979.1.6
かとうかなこ
アコーディオン奏者

Under 29
1979.1.6
かとうかなこ
アコーディオン奏者